

6 釜石にはラグビーの力がある



浜登 寿雄
HAMATO Toshio

釜石シーウェイブスRFC 理事

釜石の地に根付いたラグビーは市民の誇りとなった。一企業傘下のチームから市民チームへの生まれ変わり、東日本大震災での被災などの困難は、市民とチームの絆を強くした。震災からの復興をラグビーが紡ぐ力で進めようとする釜石での取り組みを紹介する。

北の鉄人

皆さんは「釜石シーウェイブス」というスポーツチームをご存知だろうか。かつて前人未到と呼ばれた日本選手権7連覇を成し遂げた「新日鉄釜石ラグビー部」と言えば頷いてくれる人も多かろう。昭和50年代に地元の高卒選手を鍛え上げ、数名の大卒の選手と共に、正に鋼と化したチームは並み居る強豪を次々と打ち破り、全国社会人大会を制した。そして、1976年1月15日に国立競技場で行われた日本ラグビーの最高峰「日本選手権」に出場し、若さとスピードを武器に向かってくる大学チャンピオンのチームを退け日本一の栄冠を勝ち取った。

連覇は続き、いつしか偉業でありながらも風物詩のごとく思えるようになった。それくらい新日鉄釜石ラグビー部は強かったのである。決してスタープレイヤーの集団ではない。冬のグラウンドは寒さのあまり凍土と化し、北国と呼ばれながらも夏は35℃を超える日もある。そんな条件の中で、ひた向きに黙々と厳しい練習をこなす。そして試合となれば、時に力強く、時に華麗なプレーを繰り広げ、観る者を魅了した。日本一を果たして釜石市に戻ると、駅前での優勝報告会と市内目抜き通りでの凱旋パレードが行われた。かつて日本のチベットと呼ばれた東北



写真1 第20回(1982年)日本選手権新日鉄釜石対同志社大学

の片田舎に居ながらも、日本選手権で連覇を重ねるチームは釜石市民、岩手県民、いや東北人の誇りでもあったと言っても過言ではなからう。そしていつしか彼らは「北の鉄人」と呼ばれるようになった。

立ち上がった釜石の有志たち

その北の鉄人も日本選手権7連覇以降は低迷を余儀なくされた。そして2000年、新日鉄本社が社内運動部の単独運営をやめる方針を打ち出した。同時期、名門と呼ばれたいくつかの企業スポーツチームが廃部となっ

ていた。そのためもあってか、新聞紙上では「新日鉄釜石ラグビー部廃部」「伝統の灯消える」などのマイナスイメージの見出しが先行した。しかし真意は、企業の業績に左右されず「長期的に存続が可能な地域密着型のスポーツチームに移行し、新日鉄がそれを支援する」というものであった。また、クラブチーム化することで新日鉄の社員でなくともチームに所属できることになる。多くのラグビー選手に門戸を開く素晴らしい取り組みに思えた。

だが一つの障壁があった。日本ラグビー協会の規約では「単独企業のチーム」でなければ社会人リーグに参加できないのである。つまりはクラブ化されて単独企業のチームでなくなる釜石は、社会人リーグ、更には日本選手権へ出場することができない。このままでは市民や釜石ファンの悲願である「もう一度日本一へ」の夢が絶たれることになる。この窮地に立ち上がったのは市民の有志たちだった。「自分たちの勝手な活動でチームに迷惑をかけてはいけません」として「私設応援団(故佐野隆夫団長)」と銘打って、釜石の新生クラブチームが社会人リーグへ参加できるように日本ラグビー協会へ働きかけるための署名活動を行った。

今のようにインターネットやSNSなどが普及していたわけでもない。しかしながら人口5万人に満たない小さな街の有志たちの活動は、予想を上回る大きな反響をみせた。わずか数週間で1万5千人近い署名が集まったのである。活動を知った人たちが次々と署名を呼び掛け、全国に拡散していった。私設応援団の事務局となっていた釜石市のサノスポーツのファックスは、絶え間なく送られてくる署名のために、本業の注文書が届かないというハプニングが相次いだ。「これまで新日鉄釜石ラグビー部は大勢の人たちに元気と勇気、希望を与えてくれた。今度は自分たちが釜石ラグビーの力になりたい!」との想いが通じ、2000年12月24日、日本ラグビー協会は釜石の新生クラブチーム(現釜石シーウェイブスRFC)のリーグ戦参戦を認めた。市民と地域スポーツが真に結びついた瞬間に思えた。



写真2 支援物資を運ぶピタ・アラティニ



写真3 オーストラリア帰国後も釜石を想い続けるスコット・ファーディー

震災を乗り越えて

釜石シーウェイブスの活動は先駆的なだけに困難も多かった。選手の獲得や選手雇用先の開拓だ。それでも徐々に力を付け、悲願のトップリーグ昇格に手が届きそうになった矢先の2011年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とするM9.2の大地震が発生した。今までに経験したことのない大きな揺れだった。その後に発生した巨大津波は一瞬にして大勢の尊い命や、沢山の大切なものを奪い去った。選手や選手の家族に直接の被害はなかったものの、住居が津波被害に遭うなど選手やスタッフの生活は一変した。言うまでもなく釜石市も大きな被害を受けた。当然ラグビーどころではない。チームの存続も危ぶまれる中であつたが、選手たちは「今、自分たちができることをやろう!」と支援物資の運搬や介護施設などで、力作業のボランティア活動を率先して行った。

チームには外国人選手も数名所属していた。震災後、母国の大使館から迎えも来たが、彼らは異口同音に「釜石市民は我々を温かく迎え、家族のように面倒をみてくれた。ここは第二の故郷だ。その故郷で家族が困っている時に自分たちだけ帰る訳にはいかない」と応え帰還を断った。釜石で3年間プレーし、その後オーストラリア代表にも選ばれ、2015年ラグビーワールドカップでも活躍したスコット・ファーディーや、釜石で7年間プレーした元ニュージーランド代表のピタ・アラティニたちは、2012年以降に祖国へ戻った後も釜石への想いを発信し続けてくれている。

May 20, 2013

Dear Seawaves fans and Kamaishi people

I miss you all, seawaves fans and Kamaishi people so much. Thank you for the continuous support you gave me and my family during my stay in Kamaishi.

I will never forget about Kamaishi and the memories of the tsunami and earthquake will always be with me till I die. I am happy that I spent a long part of my life there and will hope to be back sometime in the near future.

Thank you and much love.

Pita Alatini and family, Megan Tonica Tiara Trey xxxxxx



私の愛する、釜石シーウェイブスファンそして釜石のみなさんへ。皆さんにとっても会いたいです。釜石在住中、私と家族を応援し続けてくれてありがとうございました。釜石の事、そして地震や津波の記憶は私が死ぬまで決して忘れることはありません。私は釜石で自分の人生の一部を長く過ごせたことを幸せに思っているし近い将来、また戻りたいと思っています。本当にありがとう、愛を込めて。

ピタ アラティニ & 家族 ミーガン トニカ ティアラ トレイ

写真4 ピタ・アラティニファミリーからのメッセージ

ノーサイドの精神

震災後の釜石シーウェイブスには国内はもとより海外からも多くの支援物資が届いた。チームはその支援物資を近隣市町村の避難所へも配布して回った。みんな今日を生きるのに精一杯。そんなある日、市民からかけられた言葉は意外なものだった。「貴方たちがやるべきは支援物資の運搬やボランティアではない。今やるべきは練習だ！ラグビーだ！」。震災から2カ月が経とうとする頃、チームの存続と活動の再開が決定した。

震災後、釜石で初めて行われた試合はトップリーグの強豪ヤマハ発動機ジュビロとの一戦だ。震災復興と釜石シーウェイブスへのエールを目的に、電動アシスト付き自転車30台を手土産に自費で遠征してくれたのである。優しい心遣いとは対照的に、試合は手加減なしの真剣勝負。結果は一方的なものとなった。1カ月前に練習を再開したばかりの釜石と、リーグ優勝を目指して強化し続けるヤマハとの実力差は明らかだった。5-76の大差で敗れ、釜石が奪ったトライはたったの一つ。釜石シーウェイブスの勇姿見たさにグラウンドに詰めかけた市民は、さぞかし落胆しただろうと思われるかもしれないが、観客席の光景は全く逆のものであった。

試合前、試合中、試合後、釜石ラグビーの名物応援でもある大漁旗、釜石ではフライ旗と呼ぶものが何本も

振られ、常に大きな声援に包まれていた。「がんばれ!」「行け!」「タックル!」。避難所生活では声をひそめ、周囲に気を使いながら暮らす人々が、大声を出し復興の旗頭でもある釜石シーウェイブスを応援する。ラグビーができる喜びとラグビーを観られる喜びが、グラウンドにも応援スタンドにも満ち溢れていた。そして両チームに「ありがとう!」の言葉が送られた。ここはラグビーの街。市民にはノーサイドの精神がしっかり培われているのである。

ラグビーが紡ぐ

「やっぱり釜石はラグビーだ!」との想いが更に大きな夢への挑戦と続く。2019年に日本で行われるラグビーワールドカップ(RWC)の「開催都市に名乗りをあげよう」と釜石市は動き出した。たしかに日常生活を取り戻せてもいない被災地にとって、RWCどころではないのは勿論の事である。しかし、瓦礫の山の向こうにも街の明るい未来は見えていない。少子高齢化に加え、震災による人口流出。街が好転する材料に乏しい。ならばRWCを誘致して、それを起爆剤としてより良い地域にしていこうとなった。誘致は自治体が行うものなのだが、市民レベルでRWCの情報を発信し、誘致の機運を盛り上げていこうと「ラグビーカフェ」なるものがつくられた。



写真5 南ア代表史上初の黒人選手でRWC1995優勝メンバーのチェスター・ウィリアムズ(左から2人目)もラグビーカフェを訪れた



写真6 2015年3月2日開催都市決定(集英社)

手探りの取り組みではあったが、国内外を問わず色々な人たちが立ち寄り、活動を後押ししてくれた。また鹿島アントラーズの小笠原満男選手(岩手県出身)など、釜石市のRWC誘致を応援してくれる著名人をゲストに、タウンミーティングを開催するなどして徐々に市民の理解も得られつつあった。そして2014年10月、釜石市はRWC2019の開催都市に立候補し、翌年3月2日、ついに国内12会場の一つに選ばれた。市民と自治体が正にスクラムを組んで掴み取った開催地決定である。

だが、浮かれてばかりはいられない。まだまだ課題や問題が沢山ある。更に言うならば目的はRWCの開催ではない。この世界的スポーツイベントの準備や大会の成功を通し、大勢の人に笑顔が生まれ、そのつながりや経験を糧に「明るく希望を抱ける街にしていく」ことにある。そんな釜石市に昨年と今年、二人の大物助っ人が訪れた。共に元ニュージーランド代表であり、2015年のRWC優勝メンバーで世界ナンバー1スタンドオフと呼ばれたダン・カーターと、ラグビー史上最高の闘将の異名をとるリッチー・マコウである。ダンが集まった釜石市民に「みなさんは決して一人ではない。世界中の仲間がみなさんの事を想っている。みんなの想いが通じ、きっと釜石のスタジアムは世界一のスタジアムになる!」と語り、リッチーは「スポーツ

には人に夢や勇気、希望を与える力がある。釜石から世界にその力を発信してほしい。キアカハ!(ニュージーランド先住民マオリ族の言葉で「共に強くあれ」の意)と力強いエールを送ってくれた。

RWC2019釜石開催まで2年を切った。これは小さな街の大きな挑戦である。この挑戦を成功させることが震災復興を含め釜石を応援して下さる方々への一番の恩返しになると信じて止まない。繰り返しになるが、やらなければならないことが山積みしている。でも大丈夫、釜石にはラグビーの力がある。みんなでスクラムを組み前に進むのみである。



写真7 釜石ラグビーの応援名物・大漁旗を持ってイベントに参加するリッチー・マコウ